

西の湖および伊庭内湖におけるホンモロコ稚魚の生息状況

大植伸之・岡本晴夫

1. 目的

西の湖および伊庭内湖では、ホンモロコ資源が回復傾向にあり、両内湖で成育した稚魚が琵琶湖へ移動し、琵琶湖における漁獲にも貢献していることが分かっている。一方で釣り、タモすくい、投網などの遊漁が盛んになり、特に親魚の集中する流入河川では遊漁者が殺到し再生産への影響が懸念されるようになった。これを受けて、2017年から西の湖流入河川（山本川）、伊庭内湖流入河川（瓜生川および躰光寺川）において、ホンモロコの産卵保護のため4月と5月の規制区間における水産生物の採捕が内水面漁場管理委員会の指示により禁止となった。

この委員会指示の効果を評価するために西の湖および伊庭内湖(大同川を含む)内のホンモロコ稚魚の生息状況を調査した。

2. 方法

調査は、2019年4月22日から8月21日にかけて、それぞれ計9回行った。西の湖では6定点、伊庭内湖(大同川を含む)では9定点を設け、ビームトロール網(小型底曳き網)によりホンモロコ稚魚を採集した。採集した標本は氷冷して持ち帰り、ホンモロコ稚魚数を計数した。各地点の生息密度(尾/m²)を採集尾数(尾)/曳網面積(m²)として算出し、それらの平均値を各内湖の稚魚生息密度の指標とした。曳網面積はビームトロール網の間口(m)×曳網距離(m)として算出した。

3. 結果

西の湖では5月13日の調査より稚魚が採捕され、平均生息密度(±標準偏差)は0.06±0.06尾/m²(5/13)から、2.38±1.05尾/m²(6/10)でピークを迎え、0.01±0.01尾/m²(8/19)と推移した(図1)。一方、伊庭内湖では

5月15日より稚魚が採捕され、平均生息密度(±標準偏差)は0.23±0.13尾/m²(5/15)から、0.91±0.68尾/m²(6/12)でピークを迎え0.01±0.03尾/m²(8/21)と推移した(図2)。

この生息密度を2018年の同調査結果と比較すると、ピーク時の密度で西の湖では2.6倍、伊庭内湖では4.3倍であった。

採捕禁止となった2017年以降、西の湖では採捕禁止以前と比較して3年継続して高い生息密度を示した。一方で伊庭内湖では2017年に高い生息密度を示したが、2018年には明瞭なピークの見られない低調な結果となり、2019年には再び高い生息密度を示した。

ホンモロコ資源の増減には様々な事象が影響しているため、ホンモロコの資源管理のためにも今後の資源動向を把握し、委員会指示による効果を正しく評価していく必要がある。

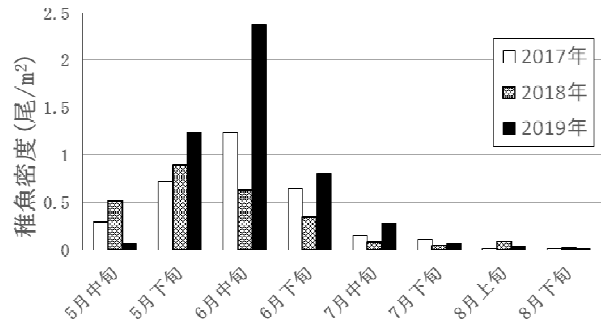


図1 西の湖6地点の平均生息密度(尾/m²)

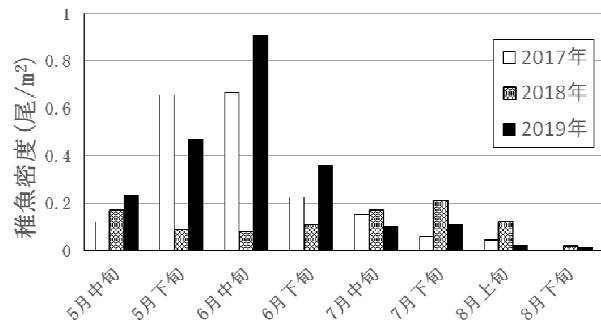


図2 伊庭内湖(大同川を含む)9地点の平均生息密度(尾/m²)